

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 25 日現在

機関番号：34315

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2010～2011

課題番号：22860068

研究課題名（和文） 天明の大火を画期とした京都の寺社建築と寺町景観の変容

研究課題名（英文） A HISTORICAL STUDY ON THE CHANGE OF TOWNSCAPE OF TEMPLE BUILDINGS  
IN KYOTO BY THE GREAT FIRE IN 1788

研究代表者

中村 琢巳（NAKAMURA TAKUMI）

立命館大学・立命館グローバル・イノベーション研究機構・ポスドクトラルフェロー

研究者番号：20579932

研究成果の概要（和文）：

本研究は日本を代表する歴史都市・京都の近世寺院建築と寺町景観に関する建築史研究である。京都に集積する寺町景観の成立画期を「天明の大火」（1788年）と捉え、この大火前後での都市景観の変容を分析した。基軸となる着想は、現存する鋳葺き仏堂の分布状況と「天明の大火」被災域を比較することで、大火による景観変容を論証するものである。この目標に向かって、フィールド・ワークと絵画分析（「都名所図会」等）を組み合わせた独自の метод論を用いた。

研究成果の概要（英文）：

This is a historical study on townscape of temple buildings in Kyoto. I took notice of the change of architectural style of temple buildings before and after the Great Fire of Tenmei in 1788. By overall field survey and investigation of pictures describing Kyoto before the great fire, I was able to prove the change of roof design and the relation between the distribution of buildings with the roof of an old style and the damaged area by the great fire.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：工学

科研費の分科・細目：工学、建築史・意匠

キーワード：京都の寺社建築・近世寺院建築・寺町景観・都市大火の歴史・天明の大火

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 着想に至った経緯

本研究の着想に至ったのは京都のひとつの町並みと「都名所図会」との出会いによる。前者は、中小寺院が群として町並みを形成する「二条川東の寺町」(京都市左京区)である。ここには約50か寺の中小寺院が連なるが、注目されるのがそれらの造営年代である。すなわち、「宝永の大火」(1708)復興期に集中する。本山寺院・塔頭の境内という類型を除けば、天明の大火以前の町並みを今に伝えるのは、京都ではこの二条川東のみと推察される。さらに、近世建築がその造形力を開花させた享保期から宝暦期の中小寺院群からなる歴史的町並みとして、希少な寺町景観だといえよう。

京都市街地は天明8年(1788)に発生した「天明の大火」の罹災地区で占められ、寺町通(鴨川西岸)などの寺院が集中地区に現存する建築群は江戸時代後期の造営にかかる。さらに、それら天明の大火復興期の建築と、二条川東でみられる天明の大火以前の寺院建築の外観特性が全く異なる様相を呈する点に着目したい。最も顕著なのは「鍛葺き屋根」である。京都市街地の仏堂では鍛葺きはほとんどみられない。それに対して、二条川東ではその仏堂の多くが鍛葺きないし裳階付き重層建築であり、独特な寺町景観を今に伝える。

### (2) 文化財調査・建築史研究の空白期

周知のように京都の都市構造は明快な階層性をもつ。中心市街地には碁盤目状の街区に中小寺社が町家に連なり点在する。一方で、東山山麓といった郊外には、本山寺院の巨大な境内が立地する。『京都府の近世社寺建築』(1983)に代表される既往の建築史研究の対象は、主に後者の本山寺院である。また文化財指定・登録の対象も周辺地区に集中する。本山寺院に当時最高の建築技術・材料が投入されたわけであり、これは当然の動向といえよう。

ところで、寺社数の分布からみれば、京都市街の方が高密度に所在し、周辺部は数が少ないという現状がある。それが文化財としてみると、京都市街地には歴史的建造物がほとん

ど所在していないことになる。これに加えて、最新の文化財調査は「近代和風建築」であり、明治時代以降の歴史的建造物を対象とする(『京都府の近代和風建築』2009)。

つまり、天明の大火復興期の建築群は、近世社寺建築調査と近代和風建築調査の双方には含まれた時期で、まさに歴史的評価から抜け落ちた空白期となっている。この歴史的評価が明確でない建築群が、本研究課題の射程となる。

## 2. 研究の目的

### (1) 目的

本研究は「天明の大火」による京都の景観変容、とりわけ中小の寺社建築とそれらの群としての寺町景観の分析を通して、現存する江戸時代後期の建築群、さらには寺町景観の意味を考察することを目的とする。

京都が我が国を代表する歴史都市である。しかし、これまで文化財保護や建築史研究の対象となってきたのは、主に郊外に立地する大規模な寺社建築である。これに対して、市街地に集積する中小の寺社建築は「天明の大火」以降の造営という年代の新しさもあって、その建築的特色や歴史的意義が明らかとなっていない。

本研究は「天明の大火」直前の京都の都市景観を描いた「都名所図会」の史料分析、京都に現存する寺社建築の悉皆的は外観調査、個別の寺社建築調査にまたがる。こうしたフィールドワークと文献調査を組合せることで、上記目的の達成を目論む。さらに本研究は、次のような意義をもつ。

### (2) 研究の意義

この研究課題の推進にあたって、社会的意義、また歴史研究における方法論上の意義のふたつを念頭に置く。

社会的意義とは、未指定文化財の価値評価への貢献である。「天明の大火」以降の建築群は、京都市街地に大量に現存しながら、その歴史的位置付けが明確でない存在である。そのため、文化財調査の対象となっておらず、

十分な保護措置が講じられていないのが現状である。

しかし、京町家や文化財建造物の寺社建築と同じく、中心市街地に点在する中小寺院からなる寺町の景観も、歴史都市・京都の魅力と価値をかたちづくる有力な文化遺産といえる。本研究を通して、こうした文化遺産としての価値が定かでない未指定文化財の価値創成が期待される。

これと同時に、本研究の歴史分析における、方法論的な特色についても述べておきたい。本研究は現存建築（フィールドワーク）と絵図（絵画史料）を素材とした建築史研究である。京都という都市レベルを分析対象としているため、絵図と現存建築の比較分析が具体的建物に即して実証的に展開できる。

例えば、本研究は「都名所図会」収録の寺社を描いた絵図を取り上げる。絵図と現存建築との比較分析により、「都名所図会」の建築形態に関する史料批判（絵師による寺社建築の描き方の特徴やその意味）を展開しうる。

このような作業により、寺社建築を群として把握し、京都の都市景観の動向を読み取るという方法において、都市史的方法論の開拓という視点も、本研究課題は内在する。

### 3. 研究の方法

#### (1) 景観を描いた絵図の分析

まず安永年間に描かれた「都名所図会」（ならびに「拾遺都名所図会」）から寺社建築の外観特徴を抽出し、天明の大火以前の京都の景観分析を行う。特に、精緻に描き分けられている寺社建築の屋根材料・屋根形態に着目する。さらに、絵図に描かれた境内の实地踏査により、絵図と現存建築の比較分析（史料批判）につなげる。

#### (2) 寺社建築と寺町景観の現状把握

これと同時に、「天明の大火」以前に造営された建築群をとどめる寺町のフィールドワーク（景観調査）を実施する。この成果を絵図分析と照合させることで、「天明の大火」以前にみられた都市景観の特徴を明らかにする。

加えて、「天明の大火」復興期の建築群が

現存する寺町地域の個別寺院建築・景観調査を実施し、大火後に造営された建築群の特徴も把握する。

#### (3) 景観変容の分析

文献調査とフィールドワークを横断した資料収集によって、「天明の大火」による景観変容を明らかとする。さらに、この知見に基づき、京都に現存する建築群の価値評価を試みる。

### 4. 研究成果

2010年度は主に文献調査および現地建築調査に取り組み、分析の基盤となる資料収集に注力した。こうした収集資料に基づき、2011年度は日本建築学会を中心に研究成果の公表につとめた。

文献調査として、「都名所図会」収録の境内図、明治期の寺社建築の情報が網羅される京都府庁文書「寺院明細帳」「社神明細帳」、浄土宗末寺の江戸時代中期の造営活動が詳細に記録された「知恩院日鑑」といった史料調査を実施し、建築情報を抽出した。

フィールドワークは、京都市街に現存する寺社建築の網羅的な外観調査を実施し、その屋根形態といった建築情報を収集した。この情報はGIS（地理情報システム）データベースに入力し、幅広い比較分析ができる基盤を整えた。また景観上の特色をもつ主要な寺院建築の個別調査も行った。

これらの情報を整理・分析し、2011年度は研究成果の学会口頭発表（日本建築学会大会、2011年8月）ならびに論文発表（日本建築学会関東支部研究報告集、2012年3月）を行った。この概要を以下に示し、本研究で得られた知見を述べていこう。

「京都市街地における鋳葺き仏堂の分布域について」と題した論文発表は、京都に現存する鋳葺き仏堂の分布様態から「天明の大火」による景観変容を論じたものである。まず、悉皆的なフィールドワーク（図1参照）により鋳葺き屋根をもつ近世寺院建築群を把握し、それらが「天明の大火」被災域の外側に集積することを指摘した（図2参照）。次いで、「天明の大火」被災域の内側、すなわち焼失建物の具体的な屋根形態を「都名所図会」（1780年）に収録された境内図から検

討した。フィールド調査と絵画分析を組み合わせた独自の的方法論によって、「天明の大火」以前に京都市街に点在していた鍛葺き仏堂の衰退を論証した。

京都に現存する近世寺院建築は、現存数の多さと造営年代の新しさから、建築史研究の対象として取り上げられることは少なかった。本研究はそれらを俎上にあげた学術的な歴史研究であるとともに、京都に大量に現存する未指定文化財の価値創成を試みた「文化遺産の価値評価研究」としても位置づけられよう。

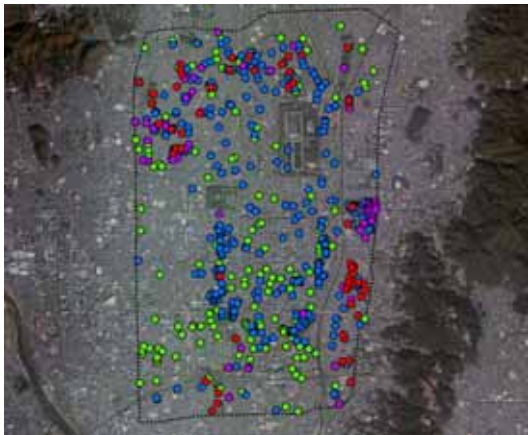


図1 寺社建築のデータベース化（中村琢巳「京都市街地の寺社における歴史的建造物GISデータベース構築」, 2012）



図2 「天明の大火」被災域と鍛葺き仏堂の分布域（中村琢巳「京都市街における鍛葺き仏堂の分布域について」, 2011）

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計3件)

中村琢巳：京都市街地の寺社における歴史的建造物GISデータベース構築 - 歴史都市の文化遺産ストック評価, 日本建築学会技術報告集, 39, 査読有, 2012年, pp765 - 770

中村琢巳：京都市街地における鍛葺き仏堂の分布域について, 日本建築学会関東支部研究報告集, 82, 査読無, 2012年, pp677 - 680

中村琢巳：近世京都の大火履歴からみた寺社建築の分布特性, 日本建築学会近畿支部研究報告集(計画系), 51, 査読無, 2011年, pp865 - 868

〔学会発表〕(計1件)

中村琢巳：東山仁王門周辺の寺町における鍛葺きの建築群について - 「天明の大火」を画期とした京都の寺町景観の変容に着目して, 日本建築学会大会, 2011年8月23日, 早稲田大学(東京都)

〔図書〕(計0件)

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

中村 琢巳 (NAKAMURA TAKUMI)  
立命館大学  
立命館グローバルイノベーション研究機構  
ポストドクトラルフェロー  
研究者番号：20579932